
没後100年：ハーン再評価の試み

福澤 清

0. 没後100年という21世紀を迎えた現時点から、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）[1850-1904]を再評価しようとする時、「異文化（世界）をこよなく愛し、世界に広く、紹介・伝達した人」あるいは、今日的な表現を借りると「グローバル・コミュニケーション先駆者の一人」ということにでもなろうか。

当時の状況を考慮すると、聊かも大げさでなく、世界的レベルで19世紀という歴史的大変革の時期に、まさしく懸命に生き、グローバル・コミュニケーターとしての役割をはたした、と言えるかもしれない。ハーン理解を深めるために極めて肝要なことのひとつに、世界的規模の視野から、ハーンが直接あるいは間接的に関与した地域の時代背景を把握する必要があるように思われる。

1. ハーンを今日的視点から評価するとすれば、1) ジャーナリスト、2) フォークローリスト（民俗学者）、3) 小説家、4) 思想家、5) 教育者、6) 宗教論者、7) ジャパノロジスト（日本学者）、などの側面から考察することになるかと思われる。

キーワードを挙げるとすれば、進化論・社会ダーウィニズム・科学・文明・野蛮・旧世界・異文化・近代化、西洋対東洋・人種問題・黄禍論・遺伝・優生学、幽霊・異界・怪談、仏教・神道・キリスト教・輪廻、自然及び異文化との共生、異国・好奇心・想像力・感情・感覚、教育・徳育、正直・嘘・陰謀・スノップ・素朴・善良・質素・他者への思いやり、明治・ヴィクトリア朝・大英帝国（パクス ブリタニカ）、移動・没個性などがある。

ハーンの思想形成の面で関係する人物としては、パーシバル・ローウェル、バジル・ホール・チェンバレン、チャールズ・ピアソン（Charles H. Pearson, 1830-1894）等が特に浮上してくる。

ハーン再考に必要な視点を列挙するとすれば、ハーンは、なぜ、

- 1) 西洋を嫌悪し、東洋を含む異国に関心をもったのか？
- 2) 近代社会を嫌悪し、旧社会（例えば、マルティニーク）を好んだのか？
- 3) キリスト教を嫌い、仏教・神道などに興味をもったのか？
- 4) 幽霊や怪談あるいは異界に興味を抱いたのか？
- 5) 弱者や小さな物に同情を寄せたのか？
- 6) 教育に関する問題（教育方法・システム・制度・効果）と真剣に取り組み、実践したのか？
- 7) 進化論、人種論に関心を寄せたのか？

というような項目に纏められるかもしれない。

以下、小論では、部分的にせよ、これらの問いに対し、できるだけ簡明な回答を試みる。

2. 西洋嫌悪・異国趣味

ハーンの異国趣味については、まず、その出自に関係がある（詳細については、福澤2004a）。両親の出会ったギリシャ（母親の言葉は近代ギリシャ語のロマイック語とイタリア語）、幼年を過ごしたアイルランド・ダブリン、ウオーターフォード、メイヨー州ラウ・コリップ、ウエールズのバンゴーで過ごした日々、同じウエールズ・カーナヴォン城付近での中国骨董品を含む東洋美術との出会い、父親の任務先インドからの東洋の土産などが、いつの間にか、幼い純真無垢の子供心にエキゾチックな世界を受け入れる土壌を形成したと思われる。13歳頃からイングランドに居を移し、ダラム市近郊ウショーにあるカトリック聖職者養成の聖カスバート校でギリシャや北欧神話を題材にした文学を愛読する。ラテン語、フランス語の勉強も異国世界開眼に寄与したと思われる。

西洋嫌悪に関しては、まず、1866年ハーン16歳時の第3学年への進級失敗、直後の左目失明、続けて父親との死別、さらに後见人であった大叔母ブレナンの破産、第3学年中途での聖カスバート校中退、挙句の果てにロンドンでの放浪生活を強いられる、という個人的レベルでは想像を絶する極めて悲惨な状況がある。客観的な状況としては、ハーンの祖国である今日のアイルランド共和国は、1847年をピークとするジャガイモ飢饉に遭遇し、また相変わらず、大英帝国の植民地下にあった。宗主国イギリスは、当時、鉄道敷設に始まる産業革命をいち早く成し遂げ、大繁栄を誇った近代的文明・産業国家「大英帝国」として知られるヴィクトリア女王（1837-1901）治世の時代である。反面、内政的には、産業の自由化による激しい競争社会となり、「個人主義・個性」という名目の下に、実は、他者を痛烈に攻撃し追い落とす、というすさまじい利己主義世界が形成され、人々の間に著しい貧富・階級差が生じ、悲惨な生活が強いられた時代でもある。このような悲惨な状況はデイケンズの作品に刻銘に描かれている。同時代の作家サッカレーも富裕階級のスノッヅ振り（紳士気取り）を痛烈に風刺している。

渡米直前の1869（明治2）年頃ロンドンで過ごしたハーン自身の回想に次のようなものがある。

「古いブラックフライア・ブリッジの近くに住み、テムズ川河畔を昼も夜も一人で徘徊していた。」

大叔母ブレナン夫人のメイドであったキャサリン・デラニーの住む家に寄宿する。デラニーの夫はドックで働いている。その時の殺伐とした下町の夜の様子：「激しく引き開けられ、砕け散る窓の叫び、「人殺し」の悲鳴、それに続く川での重い水音」

「僕は今、キップリングの恐ろしい小説あの『消えし光』を読み終えたところです。著者はこの本の中でロンドンの恐ろしさを物語っているが、その恐ろしさはロンドンへ行行った事がなければ、誰でも想像できまい...文明開化したこの大都市に二度とお金なしでは帰りたくない。そこはこの世の地獄だ。」

先進西欧諸国の中でも最先端を走る大英帝国は、「世界の工場（The Workshop of the World）」と言われる程、対外的には産業革命の成果を誇示したが、他方で、チャールズ・ダーウィン（Charles Darwin, 1809-82）の『種の起源（On the Origin

of Species) 1859』が上梓され、「進化」という、世界的規模の影響をもつ思想が現れた。生物界の自然淘汰に基づく生物進化論はやがて「社会ダーウィニズム」を生み出し、聖書の教え、教会と言う伝統的・因習的制度と真っ向から衝突することになる。物質万能主義、功利主義、産業主義、そこから生ずる経営者と労働者の対立、人間疎外、貧困、差別といった悲惨な状況、軽薄な時代が渾然一体となって現れる。このような時代を批判する人々が登場するのは至極、当然のことであったのかもしれない。当時、出版された他の著作物や活躍した作家、思想家を簡潔に列挙してみる：

1848年	マルクス・エンゲルス	Karl Marx (1818-1883), F. Engels (1820-1895)	『共産党宣言』
1857年	ボードレール	C. Baudelaire (1821-1867)	『悪の華』
	ジョン・スチュアート・ミル	John Stuart Mill (1806-1873)	『自由論』
1862年	ハーバート・スペンサー	Herbert Spencer (1820-1903)	『第一原理』
1863年	(ロンドンに地下鉄開通)		
	ハックスリー	T. Huxley (1825-95)	『自然界における人間の位置』
1866年	ドストエフスキー	Dostoevski (1821-1881)	『罪と罰』
	ストーカー	Stoker	『ドラキュラ』
1869年	トルストイ	Tolstoi (1828-1910)	『戦争と平和』
	シャーロット・ブロンテ	Charlotte Brontë (1816-1855)	
<p>既述のように、デイケンズ〔Charles J. H. Dickens (1812-1870)〕は、この当時の貧困、過酷な状況を作品の中に克明に記述しており、同時代の作家サッカレー〔W. M. Thackeray (1811-1863)〕は19世紀初頭の新興市民階級社会をスノップ社会として鋭く風刺している。ジョージ・エリオット〔George Eliot (1819-1880)〈本名は Mary Ann Evans で女性〉〕は個人教授によりギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語、フランス語、イタリア語を習得している。ビクトリア朝の典型である独立独歩タイプの女性である。ハーバート・スペンサーの友人でもあり、進化論の影響を受けている。</p>			
1900年	オスカー ワイルド	Oscar Wilde (1856-1900)	『ドリアン グレイの肖像』
1903年	バーナード・ショー	Bernard Shaw	『人と超人』

商業と産業の著しい発達の反面、過酷な生存競争から生ずる排他主義・利己主義が横行し人心が荒んでいる中で、頼るべき教会、聖書が「進化論」の下に懷疑的な存在と化しつつある時、絶対的な道德、倫理が模索されたことは容易に領けよう。ウシヨー校でのキリスト教教義に疑問を頂いた直後のハーンにとって「進化論」の台頭が、いかなるインパクトを与えたのか計り知れないものがある。

アメリカに渡ってからも過酷な生活状況は悲惨なまでに続く。19世半ばという、道德変革の時代であると共に1848年のマルクス・エンゲルスによる『共産党宣言』に象徴されるように、社会変革の時期でもある。ハーンは、社会主義・共産主義に対して批判的であった。社会主義運動の方は現実の商業的基礎である「厳しい、過酷な現実」との直面を否定している点で、共産主義の方は、人間性の真実を無視するという点で結局は失敗するであろう、と論じている。「共産主義と文明が共存することは、少なくとも不可能である」と結論付け、共産主義の確立とともに文明が存在しなくなり恐怖のみが支配するようになる。このような社会的政治的強制は、つまりは、人間の心を窒息させてしまう。変革は、外圧によるものではなく内から生ずる道德的変革である、としている。

「社会主義とは、一体、何を意味するのか、誰も知っていないようであり知ろうともしないようです。これは人類を圧迫する暴虐のうち、そのもっとも耐え難いものでしょう」

(クロスビー宛)

日本到着後、実際に日本人と変わらぬ生活を体験しながら、日本文化を観察し、日本理解を深めていく中で、例えば、明治日本の近代化政策に対し、早急すぎたはいけない、とスペンサー進化論に基づいて警鐘を鳴らしているところも保守的である。西欧の制度、システムを矢鱈^{やたら}と闇雲に継ぎ接ぎしても決して成功しない、という警告も、また、改革は暫時的にその国の風土に馴染む形でおこなうべきであろう、と指摘している点なども保守的である。具体例をあげると、森有礼の英語を日本語にすべし、という過激な発言は間違っている、と述べている。

このように、ハーンはある意味で保守的考えの持ち主であるが、だからといっ

て今日よく用いられる意味で政治的に右翼的・権威的であるか、というところでもない。例えば、19世紀において、どの国にとっても近代国家設立の土台となる教育制度について、ハーンは、国家の干渉・介入に極力、反対しているのである。ミルやスペンサーなどの間でもそうであったように、当時もてはやされた、国家に束縛されない「自由・放任（フランス語のレセ・フェール）」主義を受け入れているのである。権力者による弱者（貧しきもの、女性、子供、小さな生き物）抑圧などに対しては、特に反発している。西洋対東洋については、かなりの好き嫌いはあるが、比較すべき項目内容により、どちらの側に組みするか一定しないところがある。根源的に、ハーンという人には例外的な側面はあるが、特定のナショナリズムはない、と見做すべきかもしれない。

後年、パーシバル・ローウェルが、『極東の魂』などで、文明社会西洋の「個人主義」と異なり、日本、朝鮮を含む東洋の「没個性」が、非文明性、後進性を生み出している、と批判するのに対し、ハーンは、「東洋人の個性欠如」こそ、日本人の最も美しい意義深い点、として逆に賞賛する。日本人の没個性は「家、社会、国家といったものの為に自分を抑制する精神によって、ずっと宗教的に長い間、規制されてきた結果である」、あるいは「義務の為に自分を犠牲にしようとする最高の道徳的傾向である」とし、「性格および精神的な進化を大々的に犠牲にしてようやく達成されたもの」と見なす。「西洋の道徳は不道徳に満ちている。いつかは、より偉大な道徳が生まれるのであろうが、それは、競争社会が消滅した時点である」というハーンの記述は、まさにビクトリア朝時代を体験した人ならではの発言である。これは、自己の発展は、純化、すなわち個人主義（利己主義）から自己犠牲への発展を意味し、スペンサーの説く「進歩の法則は、完全な分離への方向、つまるところ、完全な結合への方向」「最高の個別化が最大の相互依存」「自由と義務、個人と社会、人間法則と自然法則の和解の成立」等の陳述と一致する。21世紀の今日、よく耳にする「自然・社会との共生」というスローガンは、19世紀の時点において既に、幾つかの異文化体験を経てハーンが到達した「人間が人種を超えて達成すべき道徳的方向」と軌を一にする。スペンサー理論に基づいて、

進化論的倫理体系をハーンは懸命に模索していたことになる。ハーンがスペンサー理論に心酔していく過程を証拠付ける書簡、著作等の例をごく一部ながら抜粋しておく。

Hearn significantly reviewed Herbert Spencer's *Principles of Sociology* and called attention to the author's "synthetic philosophy".
(E. Stevenson 1961, 116)

「私は『第一原理』を読み終わったその日から——まったく新しい知的生活が開けたのです。」
(クレービエル宛、Krehbiel)

『社会原理』を科学的進化論である、と見做し、神道について

「神道の祖先崇拝と同じように、スペンサーがあれば余すところなく跡付けた宗教進化の一般法則に準じて、やはり埋葬の儀式から出たものである。」

(「家庭の祭壇」『知られぬ日本の面影』)

「ある種の原始的な儀式、古めかしい祝詞や祭文、また、貧しい信者たちが抱く素朴な考えの中にさえ、神道ははっきりと姿を留めている。すなわち、それは——スペンサーの言葉を借りれば、「あらゆる宗教の根底をなすもの」——死者に対する尊崇の念である。」

(「家庭の祭壇」『知られぬ日本の面影』)

「家庭の祭壇」は、熊本時代の1891(明治24)年11月下旬より執筆開始されているが、フュステル・ド・クーランジュ (Fustel de Coulanges, 1830-89) の『古代都市 (La Cité antique)』(1864)に基づいて、古代ギリシャ・ローマ社会に特徴的な諸制度、例えば、古代人の宗教、とりわけ祖先崇拝、死者への尊崇の念、家制度は、日本と酷似している、とハーンは述べている。

クーランジュは、宗教という視点から古代ギリシャ・ローマを概観し、変化を革命と見做し、都市の発展について論じている。アテネ・ローマを主とし、スパルタを論の補強例として挙げている。各都市共通の現象について論じ、その内容はスパルタにも適用できる。古代政治は宗教と密着していることが判明する。

人間のエゴ(我)は、個ではなく前世に生きていた無数の魂の合成であり、人

間の脳には祖先の全ての脳が受けた無数の経験が伝えられ封じ込められている（「前世の観念」）。祖先から受けた超個人的な経験を「進化論」に基づいて指摘するハーンの姿勢は、彼が神話や伝説に興味を示すのと、軌を同一にするものであろう。

スペンサーは、ビクトリア朝にあって、下層中産階級から独立独歩で自己形成し、ヴィクトリア・ブルジョワジーを代表する思想家・ノンコンフォーミスト（非順応主義者）で、既成の権威に対する無関心を装い正統に対して異議を唱える傾向があった。この非干渉的自由主義は、父の影響によるものであり、通常の知識を得る方式に疑問を抱く。受動的な受容より、自助（Self Help）の奨励、独立の調査研究に価値をおく。彼の「教育論」は、発見の過程と興味の原則との統一を図るが、これは、叔父ウイリアムの影響によるものである。彼の、今日で言う教育メソッドは、「直接的な方法」開明的な教授法で、「討議」を中心に、知的・道徳的訓練を伴う。彼の「社会有機体的進化論」は、「社会ダーウイニズム」として発展していく。

ミド・ヴィクトリア的レセ・フェール（自由放任）の教説は、明治日本の自由民権運動、解放運動の思想的武器となり、スペンサー教育論の翻訳が約30冊も刊行され、一大社会現象となる。これは、アメリカの実利的教育法論とも連動している。知的訓練においても感情の側面を重視するが、これをハーンも大々的に継承している。「社会的有機体説」というのは、社会有機体は複合的な組織体であって、それぞれの組織は人々の性質から発生し、それに応じて固有の成長を遂げるものであり、また、この過程は極めて緩慢に進む。このような「進化論」に基づいて、教育制度も作られるのではなく、成長する、という。ダーウインが生物学的な面で指摘したように、獲得形質は遺伝するが、この遺伝的伝達は身体的特性と同様、心的特性にもあてはまる、と主張される。スペンサー同様、社会学の祖と言われる、フランスのコント（Auguste Comte, 1798－1857）も個人の教育は人類の教育と同一の諸段階を示す、と指摘している。スペンサーは、ロック John Locke (1632－1704) の「子供を早く人間として扱えば扱うほど早く人間となる。」『教育に関する考察』を参考にし、体罰や強制を排除している。今日的な意味で

の教育システム（教育制度／内容／方法／という技術的側面）とその理念ともいうべき「教育思想」は一体である、と見做している。

3. ハーンがスペンサー（Herbert Spencer 1820－1903）の著書『社会学原理（Principles of Sociology）』3 vols. 1876-1882（明治9－15）と出会ったのは1882年のことで、著作を通じ生涯の崇拜者と見做すようになるのは、1885年7月『第一原理（First Principles）』（1862）を読破した後とされている。読み終えたその日からハーンにとって全く新しい知的生活が開けた、という。スペンサーは、ダーウィン（Charles Darwin 1850－1881）やその弟子ハックスリー（Thomas Huxley 1825－1895）などにより提唱され一世を風靡した「進化論」という一大思想に基づいて、世界・社会・人生などすべてを体系化し説明しようと試みる。ハーンのアメリカ時代の出会いであるが、ハーン最期の著書でジャパノロジストとしての地位を不動のものにした大著『日本解釈ひとつの試み（An Attempt at Interpretation）』（1904）の中にはスペンサーへの言及が至る所で散見される。ハーンはスペンサーの理論的枠組みの中で、日本や日本文化に関する議論を展開し、日本理解を深めていった、ということの証である。

例えば、「祖先崇拜進化の歴史」の一環としての「日本の祭りの歴史」もスペンサーの主張する「宗教発達の法則」を支持する事例のひとつとして挙げられよう。古代の祖先崇拜は「あらゆる宗教の根源」である、と見做す考え方である。また、「神道」に関する箇所でも、「宗教制度の社会に対する大きな価値は、集団に凝固力を与え、統治を強固にする点であり、社会学的に言えば、宗教の価値は、その宗教の保守精神にある」というスペンサーの考えを援用して議論を展開している。『日本解釈—ひとつの試み—』の中に、次のような記述がある。

法律は、書いたものでも、書かれないものでも、どちらも生きている者の上に、死者の支配を公式に表したものである。過去の世代が、その持っていた肉体的・精神的な性質を伝えることによって、現代の上に働きかける力、——また、生活の慣習と様態とを残すことによって、過去が

現在に働きかける力、この力に加えて、口から口に、あるいは文字によって受け継がれた公民としての行為を定めた規則を通して働きかける力がある。この真理が黙々たる祖先崇拝を包含していることを示すために、私は、この真理を強調するのである。(中略) 死者の手はなかなか重く、今日でも、それは生きている者の上に重くのしかかっている。

日本に初めて進化論を紹介した人の中に、「国楽の創出と音楽教育の開拓」「吃音矯正事業の着手と発展」その他で多大なる業績を残した伊沢修二(1851-1917)がいる。留学中、ダーウインと思想的にほとんど肝胆相照らす仲と言って良いトマス・ハックスリーが訪米して来たこともあって、スペンサーの社会進化論(有機体説)が米国で最盛期を迎えるが、その時にこの影響を受けたようである。『生種原始論』(明治12年)という本が刊行されている。(渡米する前に中浜万次郎(1827-1898)に英語を習っていたようであるが現地での実生活には相当の戸惑いがあった由である)。驚くべきことに、明治期日本で、1877(明治10)年から約20年の間にスペンサーに関する翻訳書が30数冊も刊行されている。なぜ、このような異常とも言うべき事態が生じたのであろうか？

日本は、当時、封建時代から近代国家形成への推移期である。アジアの周辺国家はヨーロッパ列強により植民地化されており、早急に強力な独立国家を形成する必要があった。当時の駐米公使 森有礼(1847-1889)は、1873(明治6)年スペンサーと会い、伊藤博文(1841-1909)の命を受けた後、大日本帝国憲法の起草、さらにその英訳についても意見を求めている。日本の伝統的歴史的状況の中で、森は、本来の意味での国民国家を形成するためには、いかにして国家と個人を結びつけるか、という課題があると考え、その問題を解決するための近代的理論としてスペンサー理論を参考にすべきである、と結論付けた。当時『社会学原理』第2巻第5部を執筆中であったスペンサーは、相談を受けて日本の歴史・文化に非常に興味を抱いた、という。早急な近代国家創出に躍起となっていた日本 [= 森] に対するスペンサーのアドバイスは、次のような内容である。

新しい諸制度は連続性を破壊することを阻止するために、できるだけ現在の諸制度に接木され

なければならない — 新しいものによって古いものを取り換えるのではなく、古い形態を次第に大きな程度まで修正しなければならない。(1892年 8月23日付 書簡)

ハーンも『日本解釈—ひとつの試み』の中で、スペンサーの『自伝』から次のように引用している。

「制度は国民性に依存するものである。制度の外見をいくら変えたところで、その本質は、国民性と同じく、そう急速に変わるものではない」「宗教制度を急に変えると、政治上の制度の場合と同じで、後には必ず、反動がくる。」

他方、板垣退助(1837-1919)達はスペンサーの著書のひとつ『社会静学(Social Statics)』(1855)を「民権の教科書」、スペンサー自身を「民権の本尊」と見做していたとのことである。したがって、その著書は日本において予想を超える売れ行きとなった由である。が、板垣とスペンサーの直接会談は不首尾に終わっている。1870(明治3)年、外務省弁務少記として森有礼に米国に随行した外山正一(1848-1900)は、1876(明治9)年ミシガン大学において哲学と化学を修め化学科を卒業して帰国し、開成学校の西洋史の講義でスペンサーを紹介し、その著書も用いた。一緒に教壇に立ち、後に美術関係で有名になるフェノロサ(Ernest Fenollosa, 1853-1908)も政治学の基礎としてスペンサー社会学について講義している。このようにして、日本の大学で社会学、心理学、哲学(倫理学)の講義でスペンサーが取り上げられるようになったことも日本におけるスペンサー・ブームを生み出す要因になったかと思われる。

スペンサー「進化論」の観念が、例えば中国で魯迅(Lu Xin, 1881-1936)にも影響を及ぼしたように、世界規模で受け入れられたのは、その考えが生物・地球の進化に留まらず、社会・国家(政府)・工業・商業(産業)・言語・文学・科学・芸術(美術・音楽)の発達／進化も含めて、継続的に単純から複雑な段階への同一の「進化」を含意させた点にある、と思われる。同質から異質なもののへ進化する、という「万物の法則」が、宇宙・文明・社会など、あらゆるレベルで観察される、というものである。因みに、「最適者の原理 Survival of the Fittest」とい

う「自然淘汰」の用語はダーウィンではなくスペンサーによる、と言われている。スペンサーの学説が明治日本の初期に歓迎されたもう一つの点は、進化論がキリスト教と対立する側面があるように思われたことである。

キリスト教嫌いであったハーンが祖先崇拝を美德とする日本に好意的姿勢を示し、そのことに対しスペンサー学説の「進化論」に基づいて様々な説明を行っているのは興味深い。

19世紀後半という時期の同時代人としてのスペンサー、ハーンそれにチェンバレンは、このうち誰一人として正規の高等（大学）教育は受けていないが、著作や陳述を通じて大学人を筆頭とする当時の知的階級の多くの人々に質的にも量的にも少なからぬ影響を与えた、ということは、否定できない事実である。

スペンサーは、数度に渡ってスコットランドのエジンバラ大学総長職に請われたが、これを固辞している。「教育はいかにあるべきか？」という問いに思いを巡らす時、家庭教育、感情教育を土台にし、道德的自己実現を掲げるハーンのエデュケーションシステムの捉え方は、21世紀の今日でも、依然として有効であり熟慮すべき内容を些かも失っていない、と断言できるであろう。

4. 外国におけるハーン研究

4.1 ハーンとアイルランドの作家たち

ハーンの海外での現時点における評価は、どのようなものであろうか？ 2歳から約10年間、幼・少年期を過ごしたアイルランドでは、数年前からダブリンの作家記念館に他のアイルランドの作家と並んで彼の記念額（顔写真）が掲げられるようになっているが、アイルランド作家に対するような詳細な紹介・説明は無く、日本研究者として簡単に触れてあるだけである。記念額は、元駐日アイルランド大使、あるいは駐日大使館に勤務したことのある人々の尽力によるものであるが、彼らのハーンへのさらなる関心は、「ハーンおよび作品の中に観察されるアイルランド性」にスポットをあてた論文集あるいは単行本として結実している。[Sean G. Ronan ed. (1997), *Irish Writing on Lafcadio Hearn*, Paul Murray (1993), A

Fantastic Journey etc.]

また、ギリシャから母親とともに父親の郷里ダブリンに初めて移住して来た時に一時期、居住した親戚の家で、現在、B & B / Town House となっているガーデイナー・ストリート・ローア (Gardiner Street Lower) の家、及び、リフィー (Liffey) 川より南にありハーンが大叔母サラ ブレナン (Sarah Brenane) と一緒に住んだことのある旧居のうち2軒は、正面玄関にハーンのプラークが掲げられ顕彰されている。しかし、一般的に、今日でもアイルランドの人々の間でのハーンの知名度はかなり低い。同様の現象であるが、日本 (熊本) でも良く知られている『妖精の女王 (Faerie Queene)』の著者、詩人エドモンド スペンサー (Edmund Spenser (? 1552-1599)) についても、この作品の創作されたコークの住民を始めアイルランド人にほとんど知られていない。

ダブリン大学のトリニティ・カレッジ (1592年創立) のカレッジ通りバス停からダブリンの南、ダブリン山麓にあるラスファーンナム (Rathfarnham) ホワイトチャーチ (Whitechurch) 行きのバス15Cを利用すると毎日ハーンの旧居を垣間見ることになる。この旧居のある Liffey 川の南の地区は相対的に治安が良く、当時は裕福な人々が居住していた郊外の住宅地であるが、そのうちのひとつレンスター (Leinster) 地区は今日ダブリン市内でも生活するのに最も便利な評判の良い住宅街のひとつになっている。驚くべきことに、『ダブリン市民 (*Dubliners*)』や『ユリシース (*Ulysses*)』で馴染みのある20世紀最大の小説家といわれるジェームズ ジョイス (James Joyce (1882-1941)) の生家であるラスガー (Rathgar) 地区のブライトン スクエアー ウェスト41 (Brighton Square West) の家、そして生後まもなく移り住んだラスマイン (Rathmines) 地区近くのカースルウッド アベニュー 23 (Castlewood Avenue) の家、さらには、ジェームズ ジョイスの両親が結婚式を挙げた教会 (The Church of Our Lady of Refugee) もこのハーンの旧居から歩いてすぐの所にある。ジョイス一家はこの後、ダブリンの郊外線ダート (DART) の南方ブレイ (Bray) 地区から、アイルランド人の特性のひとつと見做されることの多い「怠惰で酒好き」の父親のために治安の悪いリフィー川より北の住宅を10回近く引っ越して過ごすことになる。

ハーンと手紙を交わしたことがあるノーベル賞作家イエーツ (William Butler Yeats (1865-1939)) とともにアイルランド文芸復興に尽力した劇作家シング (John Millington Synge (1871-1909)) もラスファーナムの郊外ニュートン ビラ (2 Newtown Villas) で生まれている。『海に騎り行く人々 (*Riders to the Sea*)』『西海の伊達男 (*Playboy of the Western World*)』『アラン島 (*The Aran Islands*)』などの作品がある。TCD (Trinity College, Dublin) の学生時分からアイルランド語その他の言語に関心を持ち勉強していたこと、パリで出会ったイエーツの薦め等があってアラン島に住み着いて上述の作品を残すことになる。英国からのアイルランド独立を標榜することで一致したこともある。他方、ジョイスはイエーツと行動を別にし、むしろ成熟したヨーロッパ人たらしとした。アイルランド性、アイリッシュ的なものを侮蔑し自ら好んでアイルランドを去り、ゴールウェイ出身の愛妻ノラと共に、ヨーロッパ大陸で苦しい生活を送りながらも (Self-Exile)、作品に関する限りダブリンに固執する、という極めて屈折した人生を送っている。ハーンの場合、ジャガイモ飢饉 [The Great Hunger, 1845-1848] に遭遇した多くのアイルランド人同様、自分の意志とは無関係の大叔母の破産という理由で故国を去らざるを得なかった。結局、以後、二度と故郷で生活を営むということは無かった。

ハーンが日本の土を初めて踏んだのは、1890 (明治23) 年、39歳の時である。この当時、アイルランドはイギリスの植民地下にあり、ロンドンには多くのアイルランド人が住んでいた。著名なアイルランド人を3名挙げると、バーナードショー (George Bernard Shaw, (1856-1950))、イエーツ (William Butler Yeats (1865-1939))、オスカー ワイルド (Oscar Wilde (1854-1900)) がいる。この3名は顔見知りで、特に先輩格のワイルドは、郷里の後輩二人の面倒をよく見、何かにつけ親切に遇している。ワイルドの生家、育った家はトリニティ カレッジ (TCD) のすぐ近くにあり、そこからショーの生家もさほど遠くはない。後年、同性愛裁判でワイルドが不利な状況にあったとき、ショーはワイルドに対し、有利な証言をして補助することのできる立場にありながらも積極的に救いの手を差し伸べなかったのは不可解である。幼少年期の地味で母親の愛情に飢えた、フランス語コ

ンプレックスのショーと当時のダブリンの名士を集めてはパーティに明け暮れる派手な生活、服装も華美でフランス語にも長けていたワイルドとの対照的な一面が関係したのであろうか。ショーは、小説家になろう、と決意して1879年3月から9月まで毎日、単語数1500位の文章修行を己に課している。また社会を改善しようという意図からマルクスの資本論について一生懸命勉強し社会主義者たらん、としている。また、英語のスペリングは合理的でないとして、修正案まで考案し一部実践も行っている。発音やスペリング面での英語への関心は、ミュージカル『*My Fair Lady*（原題 *Pygmalion*）』の花売り娘と言語学者ヒギンズ（Higgins）教授の設定に具現されていると見做すことができる。TCD 近くのダブリン国立美術館は、子供のいないノーベル賞作家ショーの寄付に負うところ大で、今日でも彼のレリーフが同館に飾られている。ワイルドは、周知のように、裁判に敗北し牢獄生活を経た晩年、文無しで物乞い同然であった事を考えると人生の容赦無い過酷な運命について思いを馳せざるを得ない。

このワイルドは、人生絶頂の折にアメリカ講演を行っており、ハーンはニューオーリンズで新聞記者であった時分に、同郷という縁からか、この講演紹介に関する記事を2回ほど好意的に掲載している。しかしながら、『ニューオーリンズ文学波止場（*Literary Levees of New Orleans*（1998））』という小冊子によれば、ニューオーリンズの名士、文士であるケーブル（George Washington Cable（1844－1925））の家をワイルドが訪問した時、ケーブルの子ども達にはワイルドの奇抜で派手な服装、長髪は多いに受けたが、隣人達はそれに呆れかえり、後でワイルドのことを“fool”であると話したそうである。因みに、1882年6月のニューオーリンズのグランドオペラ（Grand Opera）でのワイルドの講演は、不評だったとの由である。

ウェルチ（R. Welch（2001））の『簡明アイルランド文学案内（*The Concise Companion to Irish Literature*）』によれば、ハーンは東洋学者（オリエンタリスト）・哲学者で、日本文化・日本人の生活を賛美した、とある。オリエンタリストとあるのは、『中国怪談集（*Some Chinese Ghosts*）』[The Soul of the Great Bell, The Story of Ming-y, The Legend of Tchi-Niu, The Return of Yen-Tchin-King, The

Tradition of the Tea-Plant, The Tale of the Porcelain-God』という中国に関する作品もあるからであろう。哲学者である、というのは、スペンサーやダーウイン、ローウェルに言及しながら、例えば、『日本：解釈の試み（*Japan: An Attempt at Interpretation*）』などの著作を公刊しているため、と思われる。

4.2 アイルランド系アメリカ人作家として

不思議なことに、アイルランドはベケット（Samuel Beckett (1906–1989)）、ヒーニー（Shamus Heaney (1939–?)）といったようなノーベル賞作家、詩人、古くはスウィフト（Jonathan Swift (1667–1745)）など著名な作家、詩人を輩出している。アイルランド系アメリカ人も含めると以下のような作家が浮上してくる。

フォークナー（William Faulkner (1897–1962)）

ミシシッピ（Mississippi）州生まれであるが、両親は北アイルランドのアルスター（Ulster）出身。フォークナー（Faulkner）家はデリー（Derry）に多い名字であるが、最初の詩集を出版した時に、本来の Faulkner というスペリングに戻る。ジョイス同様、「意識の流れ」を重視。修辭的文体。ノーベル賞、ピューリッツァ賞を受賞。

オニール（Eugene O'Neill (1888–1953)）

New York 生まれ。両親はキルケニー（Kilkenny）、ティペラリー（Tipperary）からの移民。ノーベル賞、ピューリッツァ賞。

スタインベック（John Ernst Steinbeck (1902–1968)）

『怒りの葡萄（The Grapes of Wrath）』など多数の作品。ノーベル賞

ミッチェル（Margaret Mitchell (1900–1949)）

代表作 『風と共に去りぬ Gone With the Wind』でピューリッツァ賞。

フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald (1896–1940)）

代表作 『The Great Gatsby』、Fermanagh からの移民。

ハミルトン（Pete Hamill (1935–?)）

ニューヨーク、ブルックリン生まれ、Belfast からの移民。

日本人ジャーナリスト Fukiko Aoki の夫でもある。

ニューオーリンズにおけるハーン

ケルト系移民の多いニューオーリンズ（ケルティック サウス、(Celtic South)）でのハーンの成果は、

(1) 2000項目近くの新聞記事（ニュース）、(2) 多くの社説（未だに未発掘の記事あり）、(3) 哲学、文学、宗教（例えば、アフリカに起源があるとされるヴードー（voodoo）教、音楽、旅行に関する数百の書評、(4) フランス文学の翻訳 [ゴーチェ (Theophile Gautier)、アナトール フランス (Anatole France)、モーパッサン (Guy de Maupassant)、ロチ (Pierre Loti)、(5) 詩（集）への傾倒 [The Amateur Musician, The Fatal Plunge]、(6) 自著の出版 [『飛花落葉集 (Stray Leaves from Strange Literatures) 1884』、『中国怪談集 (Some Chinese Ghosts) (1885)』]、(7) 多くの短編集および小説 [『チタ (Chita: A Memory of Last Island) (1889)』]、(8) フランス語、スペイン語系クレオール文化の研究 [『クレオール料理 (Cuisine Creole) (1885)』、『Creole Cookbook (1901)』、『ゴンボゼーブ (Gombo Zhebes: A Little Dictionary of Creole Proverbs) 1885』] などである。

したがって、「文化の翻訳者 (Cultural Translator)」「比較人類学者 (Comparative Anthropologist)」と呼ばれることもある。中国語の勉強も試みたがこれは不首尾に終わっている。残念ながら、今日でも当地在住の一般の人々のハーンへの関心が高いとは決して言えないが、日本に関心のある人々の間では、徐々にではあるにせよ、静かなブームを呼びつつあることは確かである。

以上、今日的観点から、ハーン再評価のいくつかの論点について概観してみた。

【参考文献】

会田倉吉 (1985) 『福沢諭吉』 吉川弘文館

坂東浩司 (1998) 『詳述年表 ラフカディオ・ハーン伝』 英潮社

Brown, A. (1998) *Literary Levees of New Orleans*, Starrhill Press.

- 大東俊一（2004）『ラフカディオ・ハーン思想と文学』彩流社
- 福澤 清（2004a）「語学教師そして文学・言語研究者としての Hearn」
『ラフカディオ・ハーンに関する比較文化論的研究』所収28－30。
科研費 基盤研究 (B) (2) (2000－2003) 研究成果報告書
- (2004b)『グローバル化の視点から見たラフカディオ・ハーン』
熊本大学社会文化科学研究科プロジェクト研究 23－35頁
- (2004c)「グローバルな視点から」『パイディア PAIDEIA-- ラフカディオ・
ハーン没後100年特集--』16－17頁 熊本大学教養教育実施機構広報
vol. 10
- (2004d)「特集 ラフカディオ・ハーン ハーン没後100年」『東光原』熊
本大学附属図書館報 第40号 Nov. 1－3
- (2005)「異文化受容と言語政策史の一断面 — ハーンの「日本の教育政策」
を中心に—」九州大学出版会
- Fustel de Coulanges, (1864) 田辺貞之助訳『古代都市』白水社
- 平川祐弘編（2000）『小泉八雲事典』恒文社
- 飯倉 章（2004）『イエロー・ペリルの神話 — 帝国日本と「黄禍」の逆説』彩流社
- 今西錦司（編）（1967）『ダーウイン』世界の名著39、中央公論
- 犬塚孝明（1974）『薩摩藩英国留学生』中央公論社
- 金原理・福澤清編（2004）『ラフカディオ・ハーンに関する比較文化論的研究』科
研費 基盤研究 (B) (2) (2000－2003) 研究成果報告書 熊本大学文学
部文学科
- 楠家重敏（1986）『ネズミはまだ生きている』東西交流叢書2、雄松堂
- 三好信浩（1986）『日本教育の開国 外国教師と近代国家』福村出版
- 望月洋子（1988）『ヘボンの生涯と日本語』新潮選書、新潮社
- Murray, Paul (1993) A Fantastic Journey: The Life and Literature of Lafcadio Hearn,
Japan Library
- Pearson, C. H. (1894) National Life and Character: A Forecast 2nd ed. London,
Macmillan

Ronan, Sean G. ed. (1991) Lafcadio Hearn (Koizumi Yakumo) : his life, work and Irish background, Tokyo : Ireland Japan Association, 1991.

榛葉英治 (1988) 『自由民権の夢と敗北』 新潮社

清水幾太郎 (1999) 『コント・スペンサー』 世界の名著46 中央公論

下程勇吉 (1984) 『日本の近代化と人間形成』 法律文化社

Spencer, H. (1941) 市橋善之助譯『教育論』 三笠書房

高梨健吉 (1996) 『日本英学史考』 東京法令出版

高谷道男 (1990) 『ヘボン』 吉川弘文館

梅根 悟・長尾十三二 (1981) 『教育学の名著12選』 学陽書房

山田隆夫 (1983) 『H. スペンサー社会学の研究』 人間の科学社

山下重一 (1995) 『英学史の旅』 御茶ノ水書房

Yu, Beongcheon (1964) *An Ape of Gods: The Art and Thought of Lafcadio Hearn*,
『神々の猿：ラフカディオ・ハーンの芸術と思想』 池田雅之監訳、
今村・坂本・中里・中田訳 (1992)、恒文社

『ラフカディオ・ハーン (小泉八雲) 著作集 全12冊』 平井呈一訳、恒文社

『ラフカディオ・ハーン著作集 全15冊』 西脇順三郎・森亮 (監修) 恒文社

The Writings of Lafcadio Hearn, 16 vols. Houghton Mifflin, Boston and New York,
Rinsen Book Co. Kyoto